

週日の説教

金 大烈 神父 2008年9月9日(火)

《感謝の心を持ちましょう》

今日の第一朗読(コリント.6・1-11)を読んで、また、その他の聖書全般を読んで気づくのは、今の時代を生きている私たちが犯しているあらゆる罪は、ほとんど聖書の中に出ているということです。人間はもともと、群れを作り社会を作って生きようとしています。すると、そこには必ず具体的な罪が現れるのです。「コリントの教会への手紙」を通して使徒パウロが激しくおっしゃったことは、パウロの時代だけでなくその前の時代にも、現代にも、またこの先の未来にも形は違って必ずこの世と共に起こる問題だと思えます。そして、その時一番大切なことは、その中で私たちがどういう姿勢でこの世を見るか、意識するか、ということだと思えます。

実際、カトリック教会の中でもいろいろな形の信仰生活があります。そして、その中にはふつうの社会でも起こらないような、ありえないことが起こる共同体もあるのです。

たとえば、使徒パウロがコリント人達に書いたこの預言のように、現代でも同じ信者間でありながら心を和解させられなくて、社会と平行状態に陥ってしまう場合がありますね。そういう問題が起こるといことは、福音が何の役にもたたないという証拠になってしまいます。結局、私たちは表面的には忠実な信仰者の姿を見せているかもしれませんが、しかし、私たちが本当に求めなくてはならないのは、表面的なことではなく、心です。たとえみ言葉を聞いても、心からそれを受け入れ、自分のものにできなければ、結局、み言葉とは全然関係ない生き方をしてしまうのが私たちの弱さではないかと思えます。私たちがそういう弱さに負けないためには、適度な緊張感を持って生きなければなりません。だからいつも、「祈ってください、祈ってください」と言っているわけなのです。

今の時代は、犯罪がたくさん起こっています。そして、私たちもその一人として生きています。ですから、別の世界のことだと思わず、連帯責任を感じて、自分もつながっているのだから償いをささげようという心を持つことが、何よりも必要ではないでしょうか。

では、今日の福音(ルカ.6・12-19)に入ります。十二人の弟子達を選ばれたイエス様の物語が読まれましたね。その十二人の弟子達の中には特別な才能やすぐれた人格、タレントを持っている人は一人もいませんでした。いわゆる普通の平凡な人々の中から十二人が選ばれたのです。

もちろん別の面から見れば、人間として一人一人の違いはあるかもしれませんが、人間の持っている違いなどは、大差のないものです。日本の言葉にある『50歩100歩』ということですが、「50歩行っても100歩行っても少しの違いはあるが本質的には同じでそれほど変わりはない」という意味です。

人間は、多少優劣の差はあっても本質的には同じでそれほど大きな違いはないのです。それなのにそのわずかな優越を強く感じて偉そうな姿を見せてしまうと、実は一番低い人になってしまいます。そういう意味で私たちもみんな平凡なものなのです。イエス様は十二人を選んでくださったように私たちもを選んでくださったわけです。選ばれたらどういう気持ちになりますか。やはり感謝の気持ちになりますね。感謝の心が生じれば自然に謙遜になります。もし、なぜ人から「あなたは高慢だ」といわれるのかよく分からない人がいたら、自分に感謝の心があるかどうか考えてみてください。

もし先生達に生徒達への感謝の心があれば絶対に傲慢な先生にはなりません。もし政治家が国民に対して感謝の心を持っていれば、だますとか詐欺を働くとか奪い取るなどということは絶対にできません。もし司祭が信徒に感謝の心を感じていればへりくだる心を持つようになります。みんな同じではないでしょうか。私たちは神様から選ばれて愛されています。そういう気持ちがあれば自然に喜びを感じられると思えます。そしてもっと望ましい姿を人々に見せることができるのではないでしょう

か。

結局、大切なのは感謝の心です。私たちが正しい生き方をするかどうかは、いただいたあらゆるものに対して感謝しているかどうかにかかわります。もし誰かを裁こうとする気持ちが生じたならば、自分自身も裁かれることがたくさんあったのに赦された。それなのに、なぜ、何の資格でその人を裁くことができるのか、と考えてみてください。しかし、人間はやはり感情が先に出てしまうから難しいですね。それでも、このような原則をはっきり身につけようとする心がなければ、私たちにはあまり発展は望まれないのではないかと思います。

ありがとうございました。